

森とカテドラル

— der RHEIN と la SEINE の間で — 16

紀元前5世紀、イタリア半島西側ティレニア海南部の制覇権をギリシャ人と戦って失ったエトルリア人は、アルプス山脈のグラン・サン・ベルナール峠を経由して、ケルト世界と盛んに交流するようになった。経路は、レマン湖からライン河に向かう道と、セヌ川に向かう道とに分かれる。こうしてアルプス以北のケルト世界は、エトルリアの影響を強く受けるようになった。

この頃ローマはまだ、一都市国家に過ぎず、エトルリア人系の王たちによって都市の基礎が築かれ、ローマ人による共和政へと移行するときだった。ローマの形成にはエトルリア人が強く関わっている。ギリシャ文化はエトルリア人を通してローマに伝えられた。今も解明されていないエトルリア語が、非インド・ヨーロッパ系だとすると、ギリシャの先住民族や、アルプス以北の先住民族（ケルト以前）との文化の繋がりも興味深い。ギリシャ文化を取り入れ、ケルト文化とローマ文化の形成に関わったエトルリア文化には興味が尽きない。

前6世紀から、ギリシャ文化の一大中心地はアポロン神殿のあったギリシャ中部デルポイの谷だった。先住民族の聖地だったと考えられるこの神殿に掲げられた碑銘の一つに、有名な『汝自身を知れ』という箴言がある。自分は未だ自分を知らない。常に新たな探求の出発にあることを示唆するこの言葉は、終わりの無い世界を限りなく求め続けようとする、ものをつくる人間にとっては安らぎにさえなる。

ものをつくる人間は、「技術」について感知する。テクニクという言葉は、芸術そのものを指すギリシャ語のテクーネに由来するということは良く知られている。それゆえ技術とは総体的なものであり、精神（心）を形にしていける方法を指す。このことに気づけば、表現しようとする内容は、表現の方法そのものになることを知るだろう。



画家 キリコ Giorgio De Chirico (1888 ~ 1978) は、マティエールこそが絵画の本質であることを知った後、古典絵画技術の研究に没頭した。キリコはキリコになるために技術の修得に努めた。絵画における《描かれたイメージ》を越えた《マティエールの美しさ》を知ることは、美術の秘密に触れることになる。画家にとって、自らのマティエールを生み出すために伝統的な技術を握もうとすることは、絵を描くことを通して、自分自身になろうとすることを意味する。そして私達は、未だ自分自身を知らない。

絵画技術研究者としても知られるフランスの画家クザヴィエ・ド・ラングレ Xavier de Langlais (1906 ~ 1975) はブルターニュに生まれ、自らの血であるケルト文化の擁護と顕揚に努めた。レンヌ美術学校の教授でもあった彼は、素晴らしい技術書を遺している。キリコが現代絵画における技術の喪失を嘆いたように、ド・ラングレもまた、手際 *facture* と技術 *technique* を混同する美術学校の欺瞞を指摘する。現代の浮薄な動向に惑わされず、手仕事への愛と絶対の信頼を持つ人々にのみ、あの啓示のような書を著したのだという。

彼が遺した処方の実践には、長い間の修練が要る。一つの処方を私達の手が理解するためには、円環のように繋がった技術体系全体を理解しなくてはならない。時間をかけた技術の修得は、やがて大きな喜びをもたらす。書の結びとして彼は願う、「君の作品の物質的な完成を通して、君自身の完成の手助けをしたい。」と。前6-5世紀ギリシャの詩人ピンダロスの言葉を高く掲げつつ。《*Deviens ce que tu es !*》『汝自身に成れ！』

画家 五味政明